2010年度 テーマ講義「classic生成の『場』を問う：東アジアのclassicと現代」

2010年度冬学期

東京大学教養学部前期課程

EALAIテーマ講義

classic生成の「場」を問う：東アジアのclassicと現代

報告集

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

EALAI

東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（EALAI）

EALAI とは

東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（East Asia Liberal Arts Initiative, EALAI）は、リベラルアーツ教育の東アジアへの発信と着信を実践し、東アジアにおける共通の教養教育の実現を目指したプロジェクトとして、2005 年に発足し、2009 年 4 月からは教養学部の附属施設となりました。EALAI の活動の中心は、東京大学が 1999 年から北京大学・ソウル国立大学校・ベトナム国家大学ハノイ校と共同で開催してきた「東アジア四大学フォーラム」の本学における実施機関としての役割です。また、同フォーラムの運営に加え、東アジアの主要大学との間で教養教育に関する国際的な連携を推進し、本学の教養教育を東アジアに向けて発信するとともに、アジア関連基礎教育の充実を図り、本学の教養教育を充実させることも目的としています。

このテーマ講義もその一環として、東アジアの各国からそれぞれの分野の専門家を招いて行われています。今年度は EALAI の石井剛先生のコーディネートで行われたものです。

EALAI 執行委員長　西中村浩

趣旨説明

日本語で一般に「古典」と訳される「classic」とはどのようなものでしょうか。中国近代において古典的知性を極めた学者の一人、王国維（おう・こくい／Wang Guowei、1877－1927）は、「古雅なるもの」の美しさには自然美と異なる芸術美があると論じています。しかし、字義通りに解釈すれば、classic であることと古典的であることとがつねに同じであるとはかぎらないでしょう。最も卓越したものに対して冠せられる名辞が classic であり、しかもそれが時の彫琢を経たときに、はじめて「古典」として独立した価値を持つようになるとも言えそうです。また一方で、創造された当初は必ずしも審美的価値が認められていなかったものも、時を経ることで「古雅」なる美を獲得するということもじゅうぶん可能です。王国維が述べたのはむしろこちらのほうだったようです。しかし、そうだとしても、「古典」に価値を見出すのは、それがただ過去から受け継がれてきたからと言うだけではないはずです。

19 世紀以降の日本では、知の経典（classic）体系そのものの転換と知の近代化とが一体となって進みました。中国語で記された儒学経典を知の典拠とするのではなく、ギリシャ・ローマの知的伝統へと連なることは、日本の知的ディスコースにおけるモダニゼーションと同一のプロセスだったのです。つまり、古典とは、近代性の対極にあるものの謂いなのではなく、それ自体が近代を構成し補完しているとは考えられないでしょうか。古いものはそれだけで雅なのではありません。なにがしかの古い知的生産物を雅であると認定するのは現代的関心によるのです。王国維も「わたしたちが古雅だと判断するのは、実はわたしたちが今日的なところから判断している」のだと述べています。

このテーマ講義では、東アジア（中国、韓国、ベトナム、日本）を舞台として、この地域で classic がどのようなものとしてとらえられてきたのか、classic はどのような文脈のなかで生産されてくるのかを考えてきました。言わば、classic に触れ、学び、理解するだけではなく、classic が生産される条件と「場」についてより関心を持つことで、わたしたちの生活における classic の意味をさぐろうとしたのです。その営みは、単に古雅なるものへの憧憬を刺激するものである以上に、わたしたちの「いま」をより豊かに構成していくにちがいないものでした。

以上のような関心のもとで、参加者が東アジアの classic 生産の「場」に対する一定の理解を共有しながら、相互の対話を通じて、問いと関心を深めていくことをこのテーマ講義は目指してきました。そのために、授業は共通理解の基礎としてのレクチャーと、指定された教材を読解して問いを導くセミナーとの 2 本立てで構成されました。また、東アジア四大学フォーラムの枠組みのもとで、北京大学、ソウル大学校、ベトナム国家大学ハノイ校から、それぞれ王守常先生、趙寛子先生、ファン・ヴァン・ホアイ先生をお招きし、レクチャーをご担当いただきました。

最後になりましたが、このテーマ講義を支えてくださったすべての講師の先生方、スタッフの方々、参加学生の皆さんに心より感謝いたします。

コーディネーター　　石井剛

目次

ＥＡＬＡＩとは 1

西中村浩

趣旨説明 2

石井剛

講義概要紹介

東洋古典におけるベトナムの古典（1） 4

2010 年 10 月 22 日　講師：Pham Van Khoai　地域：ベトナム（レクチャー）

東洋古典におけるベトナムの古典（2） 8

2010 年 10 月 29 日　講師：Pham Van Khoai　地域：ベトナム（レクチャー）

明治の「古典復興」と正岡子規 10

2010 年 11 月 05 日　講師：品田悦一　地域：日本（レクチャー）

正岡子規『歌よみに与ふる書』(岩波文庫) 14

2010 年 11 月 12 日　講師：品田悦一　地域：日本（セミナー）

ホメーロス『イーリアス』と日本（１）..16

2010 年 11 月 19 日　講師：筒井賢治　地域：西洋（レクチャー）

ホメーロス『イーリアス』と日本（２）..18

2010 年 11 月 26 日　講師：筒井賢治　地域：西洋（レクチャー）

現代社会における国学の復興とその意義 20

2010 年 12 月 03 日　講師：王守常　地域：中国（レクチャー）

中国における classic 生成の「場」について 22

2010 年 12 月 10 日　講師：石井剛　地域：中国（セミナー）

18 世紀朝鮮の恋物語〈春香伝〉の古典化 26

2010 年 12 月 17 日　講師：趙寛子　地域：韓国（レクチャー）

現代韓国における漢文学に対する認識について 30

2011 年 1 月 21 日　講師：三ツ井崇　地域：韓国（セミナー）

編集後記 35

協力者一覧 36

東洋古典におけるベトナムの古典（1）

Pham Van Khoai（ハノイ国家大学人文社会科学大学文学部・准教授）

第 1 回：2010 年 10 月 22 日

講師紹介

Pham Van Khoai

（范文快）

ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学准教授。専門はベトナム漢文学。前近代ベトナムにおける漢文とベトナム語との重層関係の変遷について考察を重ねている。近年は現代における儒教経典の意義付けにも関心をもつ。著書に『20 世紀における漢文の諸問題』、『孔子と論語』（いずれもベトナム語）などがある。

講義内容

はじめに

classic（古典）とは、もともとヨーロッパにおける古代ギリシア古典とラテン語古典をさすことばであり、その後これらはヨーロッパ文明の基礎となった。これに対し、東アジアにおいても、独自の地域性に基づく classic の存在が、現代東アジア文明の基幹を形成した。伝統的な東アジア文明は、漢文の共有、儒学・仏教の普及に見られるような、共通する特徴をもつが、具体的には国ごとの違いがある。各国は共通の東洋古典のほかに、それぞれ独自の古典を持っている。したがって、東アジア各国における東洋古典が各国でどのように具体化されたかに注意しなければならない。今回はその中から、ベトナムの例について概括的に述べる。

キーワード

ベトナム　中国　漢字文化圏　仏教　儒学

1.西洋古典と東洋古典

古典はルネッサンス・近代以降、しばしば美学や民主主義など現代的価値の基礎として語られてきたが、古典は自然に生み出されたものではない。ヨーロッパ文明の源とされるギリシア・ローマの古典にしても、もとは中近東の文明からの影響を受けて形成されたものであるし、東アジアにも独自の古典が早くからあった。西洋古典の優位性を強調するのは、ヨーロッパ中心主義的な見方である。

今回の講義では、人類がつくった永久的価値としての古典がどのように表現されてきたのかを、東アジア、特にベトナムの例から考える。

ところで、日本とベトナムの文化はいくつかの共通点をもっているが、儒教の面では相違点が見られる。例えば、ベトナムでは科挙が実施されていたが、日本では実施されなかった。また、両者とも大乗仏教の伝統があるが、仏教建築は相当に異なる。こうした違いがあるのは興味深いことである。

2.ベトナムの歴史と地理

ベトナムの領土は、歴史的・地理的条件により形成されてきたと言える。ベトナム南部はメコンデルタがあり土地が豊かなので、歴代の政権は南下の傾向が強かった。神話上では、ベトナムに初めて国家がつくられたのは 4000 年前のことである。その後、漢・唐の頃に中国の支配を受けた（北属期）が、度重なる蜂起の末、10 世紀に独立を達成する。丁（ディン）朝、李（リ）朝、陳（チャン）朝、黎（レー）朝などの王朝が勃興し、封建自主の時代を迎え、18 世紀末の西山（タイソン）党革命を経て阮（グエン）朝に至る。清仏戦争後の 1887 年に全土がフランス領インドシナに

編入され、フランスによる植民地統治は1945年まで続くことになる。第二次世界大戦後は南北に分断され、北のベトナム民主共和国と南のベトナム共和国が対立、南を支持するアメリカの武力介入はベトナム戦争に発展し、甚大な被害をもたらした。1975年に戦争が終結し、翌76年に南北統一を達成して、国名をベトナム社会主義共和国に改めた。

3.歴史上のベトナム文化における二つの文化層

ベトナム文化は、主に二つの文化が混淆して形成されている。それは第一に、先史時代から現在まで、日常の生活文化に浸透している土着文化である。そして第二に、1世紀以降に流入した、中国文化やインド文化などの外来文化である。ベトナムは大陸の交差点に位置するため、言語・文字・政治・思想・経済などの面で、歴史的に外来文化の影響を大きく受けてきた。ただし、ひとたび受容された文化は、外来のものであってもベトナム化されてきたことは注目すべき点である。

4.歴史上のベトナム文化における東洋的共通性

ベトナムでは、外来文化のなかで仏教と儒学が基幹的な位置を占め、言語・文字・文学・仏教学・儒学・史学・国家組織・医学など多分野にわたって、知性ある古典 classic の基礎としてベトナムの現代化の進展に影響を与えてきた。

ベトナムにおける仏教の受容には諸説あるが、南方からの伝播ルートと北方からの伝播ルートが1世紀初頭にあったとされ、平和的に受容されたという。北寧（バクニン）省嬴楼（ルイラウ）は、最古のベトナム仏教文化中心地である。また、漢文の素養があり諸知識に明るい僧侶は、中国の知識をベトナムに伝える仲介役として国家機関でも重用され、10 世紀の独立運動にも大きな貢献を果たしたと言われている。ベトナムに儒学が広められたのは、1世紀末から2世紀初めにかけて後漢の太守として現在のベトナムを統治した士燮（シー・ニエップ）の功績であり、彼は以後南郊学祖と讃えられた。10 世紀に中国から独立した後には、儒学は国家組織設立と官僚養成の手段と見なされるようになる。1070 年に李（リ）朝によって孔子を祀る文廟が建てられ、以後文廟はベトナム各地につくられた。1075 年にはベトナム初の科挙が実施され、1076 年には官僚養成機関として国子監が設置されている。1442 年には初めて科挙に進士科が設けられたが、1919 年にフエで最後の進士科が実施されたことをもって科挙は廃止された。

質疑応答

Q.　ベトナム人にとって仏教は身近なものか。

A.　身近なものである。3世紀にベトナムに伝来した仏教は、土着文化と融合しながら発展してきた。稲作の国であるベトナムでは、雨乞いのために各地に寺が創建されてきた。また、李朝・阮朝では仏教は国教とされていた。

Q.　テレビで、ベトナムでは学生が試験のときに僧侶の写真をお守りとして持ち歩くという話を知った。教育面でも仏教は大切にされているのか。

A.　李朝の創始者であった李太祖は僧侶であり、当時から寺は教育施設としてみなされていた。つまり、仏教は教育的な宗教とされてきた。だから、僧侶の写真を学生が持ち歩くのは自然なことであると言える。

▲延應寺 / 法雲寺（チュア・ザウ）

北寧（バクニン）省にあるベトナム羸楼（ルイラウ）仏教の中心、3 世紀創建。

▲ハノイ文廟（国子監）・文廟門（正門）

▲天姥（ティエンムー）寺宝塔（フエ）

▲ハノイ文廟（国子監）・孔子像と神位（位牌）

（いずれも、講義で使用された資料より抜粋）

コメントペーパー

ベトナムの歴史の中で 14 世紀の朝鮮のように、朱子学など儒学を国家が重視したため、仏教が弾圧されて力を弱めることはあったのか。李朝、陳朝などで仏教が教育の面でも大切だったのは、日本において、平安時代から長期にわたって（中世)、延暦寺が天下第一の学問所だったのと似ているかもしれないと思った。日本や朝鮮半島に中国文明を導入し、かつ政治・外交において重要な役割を果たしたのが仏教の僧侶だった情況は、やはりベトナムでもそうだったのだと思った。

ベトナムについて詳しくは知らなかった歴史や仏教、儒学などがどう使われていたかが、よく分かるように教授されて、面白かった。ベトナムが漢字文化圏内の一国であるということを改めて実感した。しかし、ベトナムはインド文化を深く受容した他の東南アジア諸国（タイ、カンボジアなど）と隣接しているから、インド文化をも受容したと聞いたことがある。ベトナムはインド文化をどうのように国内で消化し、土着文化、中国文化、インド文化の三つを昇華していったのか気になる。

東洋古典と言われると、中国しか思い浮かばなかったが、中華文化圏に含まれていた地域を考えると、韓国やベトナムもかつて漢字という共通の文化・古典があったことを忘れてはいけない。このような歴史を踏まえると、ベトナムも東アジアに含まれる。中韓と同様に日本に近いはずであるのに、ベトナムのことを日本人は（少なくとも私は）殆ど知らない。今日はベトナム人がベトナムの歴史をどう捉えているかを垣間見ることができて良かった。漢字というのは、我々東アジアをつなぐ非常に有効なツールと為り得ることを今日改めて感じた。

東洋古典におけるベトナムの古典（2）

Pham Van Khoai（ハノイ国家大学人文社会科学大学文学部・准教授）

第 2 回：2010 年 10 月 29 日

前回のコメントに対する先生の返答

インドがベトナムにもたらした影響の度合いや内容は、地域ごとに違うように思われる。北部では、インド文化は仏教伝来と共に浸透した。中部と南部はより複雑である。この地域は現在ではベトナムの領土であるが、昔はチャンパ王国（192-1832）の領土であった。そのため、最初はヒンドゥー教、その後（10 世紀）は仏教が力を持ち、14 世紀頃にはイスラームが重要な意味をもつようになる。南部には PhaNam（扶南）という国が存在していた。滅亡の原因は不明であるが、カンボジアの影響が強かったことは明らかである。

講義内容

東洋文明がベトナム文化に影響を与えた例としては、言語・文字・文学・建築・史学・法律・医学などがある。こうしてベトナム文化に付与された古典的価値は、ベトナムが民族と国家の自主独立を守り、外国からの侵略戦争を勝ち抜くうえで大きな役割を果たした。

さらには、ベトナムに「文献の国」としての自信をもたせた。今回の授業では、東洋文明がベトナム文化の各分野に昇華されて形成された古典的価値について、写真をまじえながら紹介する。

1.地域共通の言語・文字としての漢文

漢文は東アジア地域に統一性をもたせる言語・文字システムであり、地域内の国家及び社会の諸活動において情報の共有を保証する有効な手段であった。ベトナムにおける 2000 年間を超える漢文使用の歴史は、中国語が話しことばとして使われる北属期と、漢字音として使われるようになる 10 世紀以降の封建自主という二つの時期に分けられる。土着民の言葉が融合してベトナム化した中国語は、かつては多音節であったが、今は単音節になっている。

また、現在のベトナム人の名前はほとんど中国人と同じである。北属期には、僧侶と土着民の富裕層がベトナム独立に力を果たした。10 世紀以前の漢字漢文使用の痕跡はあまり残されていない。それは、当時の中国の統治政策と関係があると考えられる。唐朝は、安南（ベトナム）人の進士（明経）試験参加者人数を制限することによって、彼らが官吏として権力を得ることを防ごうとしたのである。

では、独立後のベトナムでは、外来語としての中国語使用の頻度は減少したのであろうか。むしろその逆であり、独立を維持するために中国の行政・教育・外交や中央集権制を模範としたため、漢字漢文の必要性はますます高まった。宗教や文学にも漢字漢文が用いられた。

2.共通の文字の基礎の上に創造された民族の文字（国語と国文）

こうした過程の中で、漢字漢文からベトナム語に抽象的概念が流入し、ベトナム語の単語もより豊富になったのだと言える。また、漢字を構成する 3 要素である「かたち（形）―字音（音）―意味（義）」を民族の言語、すなわち国語と国文の文字化に用いるようになった。これが 13 世紀から本格的に広まっていったチュノムであり、チュノムによって国語は書きことばをもつようになったのである。

17 世紀から 20 世紀には民間伝説や詩もチュノムで書かれていた。その代表的なものは、阮攸（グエン・ズー）の『金雲翹（キムヴァンキエウ）』である。20 世紀初頭になると、ベトナムにおけ

る漢字と漢文は行政と教育の機能を失った。

3.建築

ベトナムの建築には城郭・祠・廟・寺院・宮殿・亭（ディン、村の集会所のこと）・台・陵墓などがある。建築もベトナム文化を具現化したものであり、ベトナム古典を体現していると言える。

4.黎貴惇（レー・クイドン）（1726-1784）——18世紀ベトナムの偉大な古典学者

18 世紀に活躍した古典学者の黎貴惇は、漢文を用いて『大越通史』『全越詩録』『春秋略論』『礼説』『芸台類語』など、ベトナムの歴史や文化に関する著作を数多く残した。

5.おわりに

今回の 2 回におよぶ授業では、ベトナムを例に東アジアにおける古典のあり方について紹介した。伝統的に、東アジア地域は知性を共有してきた——文字の共有、儒教と仏教の受容、文化の土着化、独立国家の建設、国語と国文の発展、文化・経済の交流など——が、classic すなわち古典の価値はそれぞれの地域性と時代性を帯びているのである。

コメントペーパー

様々なベトナムにおける漢字使用等について知ることができて面白かった。チュノムに関しては非常に興味深く、これからも是非追求していきたい。

チュノムがあんなに漢字に似ているとは知らなかったのでびっくりした。漢字の影響は自分が考えていた以上に大きかった。ベトナムでも日本でも韓国、さらには現代中国でも漢字は簡略化されたが、今でも発音や意味が似ているものが多い。英語などは例えばアルファベット 26 文字が使われるのに対し、漢字は数えきれないほどあることを考えると、すごく豊かな文化ではないかと思った。

ベトナムで漢字の読み方がいろいろあるのは、日本のように漢字が入ってきた時期が違うからかなと思った。私は名前がもともとひらがななので、漢字を決めるのが楽しかった。日本でも本当は正式な場では漢字だけ使っていたと思う。

明治の「古典復興」と正岡子規

品田悦一（本学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授）

第 3 回：2010 年 11 月 5 日

講師紹介

品田悦一
（しなだ　よしかず）

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。著書に『万葉集の発明　国民国家と文化装置としての古典』（新曜社、2001 年）ほか。著作は中国語にも訳され、その東アジア近代における古典への問いは東アジア地域にも発信されている。近代国文学の認識枠を批判的に吟味しつつ、自明化した享受の刷新を目指す。

講義内容

明治期の俳人・歌人である正岡子規は、その代表的歌論『歌よみに与ふる書』のなかで『古今和歌集』や桂園派を手本とする旧派和歌を激しく批判しながら、『万葉集』を賞賛している。従来の旧派和歌の伝統からの脱却を図り、万葉調の復興をめざす運動は、しばしば子規の歌論が嚆矢となったと言われている。だが、このような潮流は、子規以前から、近代化をめざす知識人のあいだにすでに見られていたものである。講義では、上記のような子規神話を突き崩すとともに、明治期の国民国家の建設を背景に「古典復興」が進められていく過程を示す。

キーワード

正岡子規　「古典復興」　近代化　国民国家

1.近代における子規の万葉再発見

短歌の革新に燃えていた正岡子規（1867-1902）は、1898 年 2 月から 3 月に『日本』紙に「歌よみに与ふる書」を連載し、当時歌壇の主流を占めていた桂園派に筆誅を加え、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」として古今調を批判したことで注目を浴びた。子規が俳句趣味を導入し、写生を推奨して万葉調を唱道したことは、当時大きな波紋を呼んだが、現在では古典の価値を見直したとして高く評価されている。しかし、『帝国文学』などの文芸雑誌を読んでみると、「歌よみに与ふる書」より 2 年早く、『万葉集』が『古今集』より優れているという主張がなされていた。つまり、「古今集はくだらぬ集」という子規の判定は、論調の極端さを別にすれば、知識人のあいだではとうに常識となっていたのだと考えられる。「子規が万葉集を再発見した」という説を流布させたのは、弟子たちが子規の死後に結成したアララギ派だろう。

2.明治中期の「古典復興」

明治中期の 1890 年という年は、「古典復興」という文脈においては画期的な意義をもつ。この年に、国民的アイデンティティを確証する具としての古典――国民の古典――が一挙に立ち上げられたのである。例えば、『日本文学全書』、『日本歌学全書』、『国文学読本』、『中等教育日本文典』などが挙げられる。そのなかでも、西欧の国民文学史に倣った最初の日本文学史である『日本文学史』では、『万葉集』を『源氏物語』とともに日本文学の「至宝」として評価している。ここで注意したいことが二点ある。第一点は、こうした書籍からは漢文の作品が排除されていたことである。「和漢」の古典からの「漢」の排除と、〈自国〉の古典の定義のためであると考えられる。第二点は、これらの書籍に採用された古典は、本居宣長など江戸時代の国学者が古典と見なしたものとは差異がある、ということである。

この時期には、『万葉集』はすでに〈国民の古典〉として高い地位を得ていた。この地位を支える通念を「万葉国民歌集観」と呼ぶ。そこにおいては、古代の国民の真実の声があらゆる階層にわたって汲み上げられており（「天皇から庶民まで」）、貴族の歌と民衆の歌が同一の民族的文化基盤に根ざしているとされたのである。また、その「素朴・雄渾・真率」な歌風から、枕詞や助詞などの技巧はないものとされた。

3.子規のスタンス

このように、「古典復興」が図られていた明治中期に活躍した子規は、単なる伝統詩の刷新ではなく、「国詩／国民的詩歌」――国民の精神的統合に寄与する詩歌――の創出をめざしていた。彼は、あらゆる言語活動の目的は透明で効率的な情報伝達に還元されるという「啓蒙主義的言語観」の知識人の指針と同じように、多くの国民が理解しやすい平易な表現の詩歌の創出に尽力した。つまり、近代的な国民国家をつくるために、国民全てに共有される文学の在り方を模索していたのだと言える。こうした活動は、既存の詩的様式の文学化・国民化によって「国詩」と言える実態を暫定的に成立させ、未曽有の新詩形を生み出すべき将来の世代のために土台を提供する目的で行われた。

実は、「歌よみに与ふる書」を書いた 1898 年の時点で、子規はまだ『万葉集』を熟読していなかったようであるが、それでいて、『万葉集』の歌は思うままを表現したものであり、だからこそ嫌みがないのだという趣旨の発言を以前から繰り返していた。ただし、子規は無批判に万葉調を採用しようとしていたのではない。その精神を学びつつ、短歌を「国詩」に育て上げるために、『万葉集』を利用しようという戦略をとったのである。

質疑応答

Q.　正岡子規の著作にはどのような文学的価値があるのか。

A.　それは、20 世紀、21 世紀の我々が位置づけを行うべきものである。ひとつ確かに言えることは、子規が戦略家であったということである。

Q.　子規世代が日本における国文学という学問を創出していったのか。

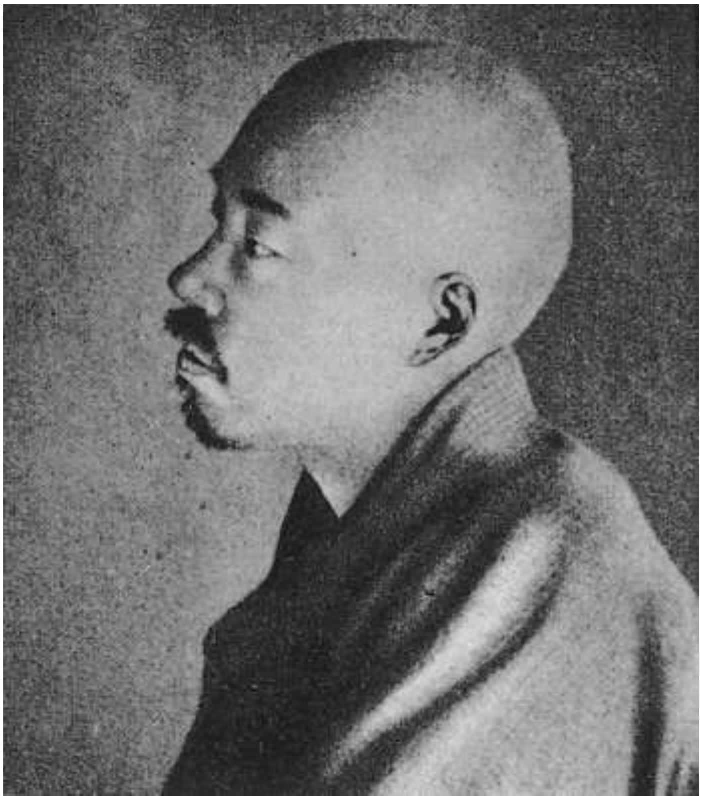
A.　たしかに、1882 年に帝国大学古典講習科やその後つくられた国書課から、国文学を担っていく人物が輩出した。夏目漱石や上田敏なども、子規とともに滑稽文学を提唱し、また、彼の文学を高く評価している。

コメントペーパー

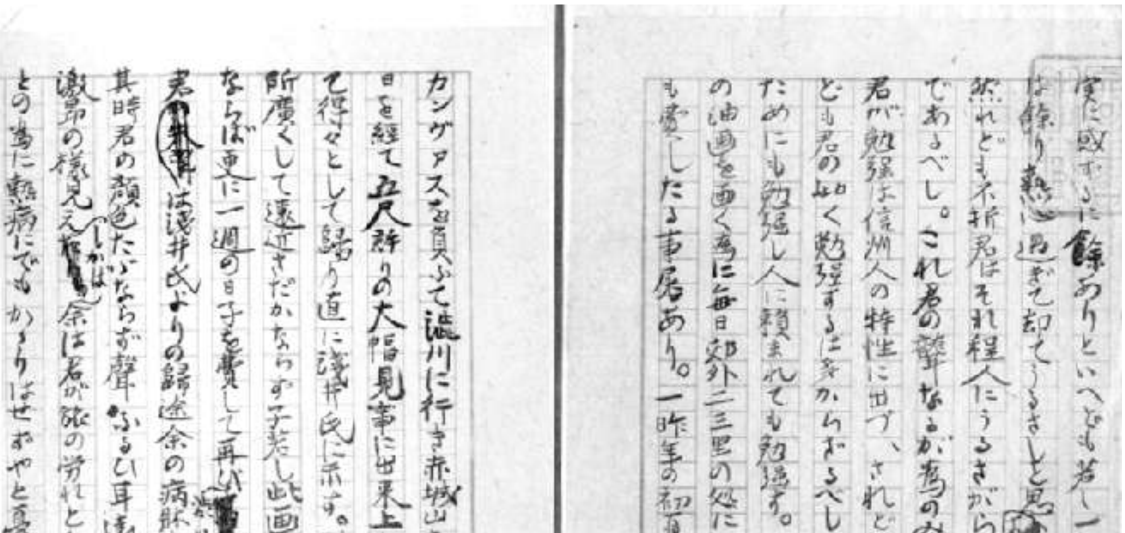
古典というものが一地域の共有された財産としてナショナリズムの高揚にとって不可欠なものであると考えられていたことは薄くは知ったことがあるが、当時の知識人としては、危機感を抱いていたのだろうということが、想像できた。日本で国粋主義的というと、私は少なくとも良くないイメージを持ってしまうのだが、当時の知識人は良くも悪くも、ナショナリズムを高揚させることまでも西洋を見習うしかなかったと思われる。子規も、そのような社会の中で、持論を展開するために、万葉集を用いただけだったという視点は始めて知り、興味深かった。

今まで僕が信じていた子規観が崩壊した講義だった。明治期のナショナリズムと結び付いた古典復興と、それに便乗した子規の事績はよく分かった。子規のある種の巧みさには感銘を受ける。しかし、後に帝国文学などで生まれていった文学形成の流れは非常に合理的だった。万葉集は万葉仮名にしかアプローチをしたことがなかったため、内容をよく知らないが、明治期の古典形成が如何なるものかはよく分かった。子規・漱石同時代人の思考の流れを探るのも面白いかもしれない。

とても個人的なことだが、私も自分の意見を述べる時に、その時代の論調をベースにするが、子規もそうだった。自分で再発見したのではなく、時代の論調の上に自分の意見を造っている。やはり国粋主義（ナショナリズム）と和文の評価は関係が深い。



▲正岡子規



實に感ずるに餘りありといへども若し一般の人より見ば餘り熱心過ぎて却てうるさしと思ふ所多からん。然れども不折君はそれ程人にうるさがらるゝは夫れであるべし。これ君の韓なるが爲のみ。君が勉強は信州人の特性に出づ、されど信州人といへども君の如く勉強するは多からざるべし。君は自分のためにも勉強し人に頼まれても勉強す。一枚方二尺位の油画を画く為に毎日郊外二三里の処に行きて一ケ月も費したる事屡あり。一昨年の初夏なりけん君

カンヴァスを負ふて識川に行き赤城山を写す。廿餘日を経て五尺許りの大幅見事に出来上りたる積りにて得々として帰り直に浅井氏に示す。浅井氏曰く場所廣くして遠近さだかならず子若し此画を画とせんとならば更に一週の日子を費して再び渋川に往けと。君は浅井氏よりの帰途余の病牀を訪はれしが其時君の顔色たゞならず声ふるひ耳遠く非常に激昂の様見えしかば余は君が旅の労れと今日の激昂との為に熱病にでもかゝりはせずやと憂ひたる程なりき。

▲子規遺墨

（国立国会図書館ウェブサイトより転載）

正岡子規『歌よみに与ふる書』(岩波文庫)

品田悦一

第 4 回：2010 年 11 月 12 日

受講生による発表

正岡子規　『古今和歌集』と『新古今和歌集』の比較

（発表者：文二 1 年　高川めぐ）

正岡子規は和歌の古今千年の価値観を転倒させた人物として知られているが、実は近代という時代の中で万葉集を近代的な目でとらえなおした人物である。正岡子規が万葉集を評価し、『古今和歌集』を批判したことはよく知られているが、『新古今和歌集』についてはどのように考えていたのだろうか。辛口な批判を展開することでも有名な正岡子規が『新古今和歌集』をどう評価していたか、『古今和歌集』との比較を通じて考える。

以上のようなテーマを設定した。調べるにあたっては、正岡子規の歌論などからこれらの和歌集について述べているところを参照し、比較した。

結論としては『歌よみに与ふる書』で「『古今集』以後にては新古今ややすぐれたりと相見え候。古今よりも善き歌を見かけ申候。しかしその善き歌と申すも指折りて数へるほどの事に有之候。定家といふ人は上手か下手か訳の分らぬ人にて、新古今の選定を見れば少しは訳の分つているのかと思へば、自分の歌にはろくな者無の『駒とめて袖うちはらふ』『見わたせば花も紅葉も』抔が人にもてはやさるる位の者に有之候。」と述べているとおり、基本的に万葉集に比べて、古今以後の古い和歌には否定的であり、言葉のいいまわしのみを重視した古今以後の作風を批判する。ただし、『古今和歌集』と『新古今和歌集』を比較したときは、『古今和歌集』の非難が目立ち、『新古今和歌集』の非難は相対的に少ない。また、「善い歌」の例としても『新古今和歌集』からの方が比較的多くの歌が選ばれている、ということが得られた。そして、正岡子規が評価する歌とその理由を読むと、良い歌の評価基準として珍しさ、新しさ、変わっている、客観的であることがあげられている。

以上が私の見解であったが、授業ではこれをもとにさらに深く正岡子規がなぜこのように評価したのか、ということを話し合った。品田教授が前回の授業で指摘していた、子規が万葉集を近代的な目でみる、そうすることによって短歌を国民的文芸にしようとしていた、との意図と万葉集と古今、新古今和歌集の評価はどう関連しているのか。このような観点から見た時、新しい、珍しい、などを評価する基準として設けているところなどは、国民に和歌の敷居を低く示したかったと言えると思った。それまで古今和歌集などで和歌を作る技巧が多く用いられているものが評価されてきたが、一般の国民はそのような技巧などよく知らず、そのままであると和歌は作りにくいものとなってしまう。だからあえて技巧的な和歌を否定し、新しいものを評価しようとしたのではないか。以上のような意見があげられ、ただ表面から比較するよりも内容が深まった議論となった。

先生からのコメント

短い準備期間にもかかわらず、よくできた報告であったと思う。

『古今和歌集』を徹底的に批判する一方、『万葉集』の歌からの本歌取りが多い『新古今和歌集』を評価する子規（及びその他の知識人）の考えは、現在の学術界におけるこの分野の研究動向までをも左右しているため、重要な論点であると言える。ここで気をつけたいことは、（前回の授業でも述べたとおり）「歌よみに与ふる書」を書いた当時、子規が『万葉集』を熟読していなかったということである。たしかに、『新古今和歌集』は

『万葉集』の影響を受けている。だが、実は、子規が批判する『古今和歌集』よりも技巧が複雑な歌が多い。また、「歌よみに与ふる書」において子規は『新古今和歌集』の歌について説明しているが、『万葉集』を読み込んでいないことからくる誤解が散見される。

コメントペーパー

今回は発表担当だったが、すごく難しかった。元来日本古典や文学に対し、全く興味がなかったため、知識がかなり不足していた。それに加え、正岡子規という歌人として有名な人の作品など読んだこともなく、日本史の知識も無いに等しいので、質の低い発表になってしまったことを申し訳なく思う【先生からのコメント：発表準備の期間が短いなかで、よくがんばったと思う――編集者注】。文学作品という人の思いから問をたてるのは大変難しいということを準備を通して実感した。しかし、今回の発表を通じて、教授のフィードバック、指摘、お話を通じて、少しだけ分かった気がした。文字に現れていることだけでなく、時代背景や、作者のいる状況を踏まえてその裏にある思いを推測することも大切だということを知った。また、日本の和歌、歴史についても少し勉強してみる気になった。

僕は和歌に詳しくないため、深い議論まですることはできなかったが、改めて子規の戦略性には感服した。古今集と新古今集の評価の違いからは、子規が大分異端的な新古今集を評価し、当時の規範である古今集を叩いていたことがよく分かった。後の萩原朔太郎が同様な和歌観を持っていたことも面白い。新古今集の成立・特色の面から考えると、決して万葉回帰ではなく、新たなる発展だったのだが、見事にねじまげられた所だったのだろうか。しかし、技巧的で遠ざけがちだった新古今集に関する知識も得られて、実りあるものになることができた。

ホメーロス『イーリアス』と日本（1）

筒井賢治（本学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授）

第5回：2010年11月19日

講師紹介

筒井賢治
（つつい　けんじ）

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授。ドイツ・マイン大学で古典文献学のph.Dを取得。文献学的精密さを駆使しつつ聖書学や古代キリスト教文学にアプローチし、新約聖書をはじめとするキリスト教古典の形成プロセスに関して新たな重要論点を導いている。著書に、『グノーシス：古代キリスト教の〈異端思想〉』（講談社選書メチエ、2004年）。

講義内容

西洋最古の文献であり、古典中の古典とも言えるホメーロスは、さまざまな文化に大きな影響を与えてきた。日本も例外ではない。今回は、日本におけるホメーロス受容というテーマに焦点を当て、「古典」とは何かを考える。その際、日本語訳テキストやギリシア哲学研究者の軌跡などを具体的事例として取り上げる。

キーワード

西洋古典　ギリシア　ホメーロス　『イーリアス』　翻訳　神話

1.ホメーロスの日本語訳について

今学期のテーマ講義では、担当教員が扱うのは主に自国の古典である。例えば、ベトナム人の先生がベトナムの古典を、日本人の先生が日本の古典を論じたように。「ホメーロス『イーリアス』と日本」と題した今回の授業は、日本人の教員が自国の古典ではなくギリシアの古典を論じるという意味で、少し特殊かもしれない。

今回取り上げるホメーロスは、紀元前8世紀頃にほぼ現在の形にまとめられたとされる、西洋最古の文献である。ギリシア語及び英語で書かれる西洋古典を専門とする人は、必ずホメーロスの『イーリアス』や『オデュッセイア』を読む。ホメーロスは、いわば古典中の古典として、多くの人々や文化に影響を与え続けてきた。

さて、日本人がホメーロスを読むには、その日本語訳を読むのが最も手取り早い。例えば、『イーリアス』には何種類もの訳本がある。最も古い日本語訳は、大正5年に英語から訳された国民文庫刊行会の『イリアード』だが、おすすめは岩波文庫の松平千秋訳と呉茂一訳である。そのほかにも、ホメーロスの作品は、中央公論新社の漫画ギリシア神話シリーズの7・8巻目、映画『トロイ』など、さまざまな形で紹介されている。

2.『イーリアス』の概要と日本語訳の比較

ホメーロスの作とされる『イーリアス』は、10年間にわたるトロイア戦争中の数十日間の出来事を題材とした長大な英雄叙情である。主題となっているのは、ギリシア連合軍の武将アキレウスの「怒り」である。アキレウスが総大将のアガメムノンと争って怒り、トロイア王国への出陣を拒むが、トロイアの英雄ヘクトルに友が殺されたために出陣し、ヘクトルを殺すというのがあらすじである。日本語訳はそれぞれ趣が異なり、興味深い。

ところで、ホメーロスが最古の古典だからと言って原始的で拙い作品を想像すると、実際は完成度が高いことに驚かされるだろう。むしろ、『イーリアス』が素晴らしすぎたために、それ以前の文化が駆逐されてしまったのだとすら言える。

3.『オデュッセイア』の概要と「古典」

トロイア陥落後 10 年目のある日から始まる『オデュッセイア』は、トロイア戦争から凱旋する主人公オデュッセイアが海上を冒険し、さまざまな困難に立ち向かいながら故郷イタケー島に待つ妻と再会するという話であると説明されることが多い。実際には、冒険譚は全体の構成の半分くらいであり、後半部分は、自分の留守中に妻ペネロペーに求婚した男たちに対するオデュッセイアの復讐を描いている。現代人にとっては、第 2 巻は船団の名前ばかりが出てくるので、退屈かもしれない。しかし、当時の人々にとっては、トロイア戦争に参加した自分たちの町や先祖の名前を冠した船団が登場するかもしれないので、この部分は重要であると考えられていた。

ここで注意したいことは、『イーリアス』にしても『オデュッセイア』にしても、建国神話ではないということである。ローマ文学・ラテン語文学の最高峰は建国物語だと言われるが、ホメーロスにはその要素がないのである。つまり、ホメーロスは特定の地域と結びつけられていない。ホメーロスが日本でも受容されたのは、このことに関係しているのだろう。

質疑応答

Q. 『イーリアス』を読むと、登場人物の名前の前に修飾語がしばしば入るが、これにはどのような意味があるのか。

A. これは、『イーリアス』が叙事詩であることと関係している。『イーリアス』はもともと伝承だったものを、ホメーロスが紀元前 8 世紀ごろに現在の形に編集したものとされている。つまり『イーリアス』は歌なのであり、韻が多く用いられている。人物の名前の直前に修飾語を入れることによって、韻をとるのである。

コメントペーパー

「西洋の古典が自分たちの古典でない」とは、私は思わない。なぜなら西洋の古典も今日の日本文化の重要なる一部であり、古典としての重要性は中国の古典（私たちの古典と言われるだろう）と同じだと思うからである。

名前は知っていながら、中身まではよく知らないホメーロスの作品を分かりやすく概観していただき、面白かった。ホメーロスの作品がその親和性によりプラトンや和辻哲郎らにより批評されていることは興味深い。ホメーロスが古典として人々にどのように捉えられていたのか、(特にホメーロスとは異郷である日本で)、和辻哲郎がどのような意味をホメーロスに見出したのか、気になる。

ギリシア文学、神話がどの程度事実であったのか知りたいと改めて思った。例えば、トロイア戦争はシュリーマンが遺跡を発掘したことから、本当にあったものと考えられるが、神話に登場するゼウスなどの神々は、神的な力は使えなくとも人間としては（キリストみたいに）存在した事実はあるのか否か。ヨーロッパの人々は、どう神話を受け止めたのかにも興味がある。

ホメーロス『イーリアス』と日本（２）

筒井賢治（本学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授）

第 6 回：2010 年 11 月 26 日

講義内容

前回に引き続き、日本におけるホメーロス、ギリシア文学及び古典の受容について、「古典」とは何かという問題意識を念頭に考える。特に、ロシア生まれのギリシア哲学研究家であるラファエル・フォン・ケーベル（1848-1923）が、日本におけるホメーロス受容に果たした役割について、彼と夏目漱石や和辻哲郎との関係を見ながら検討していく。

1.ラファエル・フォン・ケーベル

ドイツ系ロシア人であるケーベルは、モスクワ高等音楽院卒業後、ドイツで哲学･文学を学んだ。1893 年に明治政府による招聘を受けて日本に留学し、東京帝国大学で教鞭をとり、ギリシア哲学･古典諸言語などを講じた。東京音楽学校では、ピアノの指導にもあたっていた。日露戦争勃発後、祖国に帰郷せずに横浜に留まり、1923 年同地で死去した。『ケーベル博士小品集』（1919-1924）を残している。

ケーベルは、滞日中、その教養と人格により学生を感化し、大正期の知識人に大きな影響を与えたことで知られている。そのなかには夏目漱石・和辻哲郎・久保勉などがいた。漱石は「ケーベル先生」という随筆を書いている。「ケーベル先生について」を書いた和辻は、日本人として初めてギリシア文学を研究した人物である。1946 年の『ホメーロス批判』のなかで、和辻は、公家の栄華を継承していた平家の勃興と没落を歌う『平家物語』と、ドーリス人移住後の民族的行動を歌わずに、ミノース文化とともに滅んでいったアカイア人の業績を歌っているホメーロスの詩の共通点を主張している。そして、両者のような優れた作品を創った力は、そこに歌われている平家やアカイア人にあるのではなく、武骨やあるいは野蛮な部族のうちから出て来たのだと考えている。

2.「古典」とは何か

これまで、日本におけるホメーロス受容の歴史を見てきたが、そもそも「古典」すなわち”classics”とは一体何か。

“classic”の語源は、ラテン語の classis であり、その形容詞形は classicus である。英語で“Classical Studies”と言えば古典文献学、西洋古典学を意味するが、その対象とされるのは残存する古代ギリシア語・ラテン語文献全てである。ただし、残存しているものが上等（classicus） であるとは限らない。Classical Studies の目的とは、原文の復元つまり本文校訂であると同時に、古典の「受容史」を学ぶことによって後世及び現代を理解することへの助けとすることでもある。

このように考えたときに、「〇〇にとっての古典」とは何であるのかが問題になってくる。古典はしばしば特定の地域と結びつけられるが、実はそれらのなかには普遍的人間を題材にしているものも少なくない。人間であることをテーマとする古典は、我々に普遍的なメッセージを与えていると考えられる。特定の地域と結びつくことなく、人間の普遍的な感情をテーマとしたホメーロスは、まさに古典中の古典であると言えるだろう。

コメントペーパー

中国古典というのは少なくともアジア全体で共有されるものであり、中国に限られるものではない。また、昔の中国の事情が入ることはあるが、普遍的な価値もあると思う。大昔がよくてどんどん悪くなっていくという考え方（古代ヨーロッパ人が持っていた）が古代（実はつい最近までのも含めて）中国と共通していると思い、なかなか面白い。

イーリアスの普遍性を強く実感した授業だった。ロシア人のケーベル博士から和辻哲郎へ、西洋から遥か遠き東洋まで伝播したのも納得であった。イーリアスで見事に書き出された人間性には感嘆せざるを得ない。僕はギボンの『ローマ帝国衰亡史』を六巻くらいまで読んで挫折したが、読みながらなぜこんなにダラダラとした歴史読み物が名著として崇められているのか考えた。これもまた、一種の普遍性を持っていたのだと思う。全編読んだ西ローマ帝国衰亡の歴史だけをとってみても、ひしひしと伝わってくる。ローマの平和を謳歌した五賢帝時代、続く昏君と軍人皇帝時代の混乱、コンスタンティヌス・ディオクレティアヌス・ユリアヌスらの中興を経てゲルマン人らによって滅ぼされる。これは、一種平家物語にも似た一つの民族の長大な墜落とそれに伴う衰退を描いている。これはイーリアスのように人間を必ずしも見つめているわけではないが、普遍的なテーマである。だからこそ、それを意図したギボンもこの著作を「歴史書」ではなく、「歴史説本」としたのだと思う。

ケーベルという人を私は知らなかったが、不思議なことに、他の偉人の話を聴くときは、特に感じない妙な親近感を覚えた。それは、まず日本にずっと一時帰国もせずに住み、そのまま人生を終えたことと、近代哲学者の書を読み、時間と労力を徒費したという念を抱くことの 2 点についてである。この授業の内容とは関係ないかもしれないが、自分が予想もしなかった国で一生を終えるのもいい選択かもしれないと思った。哲学者はどうして、どのようにして哲学者として評価されてきたのか、私は疑問に思ったことが何度もある。ちゃんと調べてみようかと思う。ラテン語は非常に難しいときくが、古典にはロマンがあると私は勝手に思っている。人間の本質をもしかしたら表しているかもしれないと少し思った。「古いほど良い」という歴史観は、文学や哲学・思想の面で考えると、ある程度は納得できる点はあるかもしれないと個人的に思った。

現代社会における国学の復興とその意義

王守常（北京大学哲学系・教授）

第 7 回：2010 年 12 月 3 日

講師紹介

王守常

（Wang Shouchang）

北京大学教授。1980 年代より「中国文化書院」という民間ベースの伝統文化普及の中心で実践に携わる。また、1990 年代の中国における学術史・国学ムーヴメントを思想的に準備した雑誌『学人』の編集者の一人でもある。社会主義中国における伝統的思想文化の位置づけと意義について、実践者の立場からの批判的省察を行う。

講義内容

史上最も発展の速い高度経済発展の真っただ中にあり、さまざまな問題に直面している現代中国において、儒学はどのような存在意義をもちうるのか。このことを考えるために、思想史、伝統文化、及び文献注釈の角度から、中国現代社会のジレンマについて議論する。

<u>キーワード</u>

中国　儒教　伝統文化　文献注釈　理論批判　政治批判

<u>1.方法論の問題</u>

マルクス主義の方法論によると、人々は生産と経済交換の中で人間的な行為を形成するが、マックス・ウェーバーの経済倫理論によると、宗教心理的なものが経済を推進するのだという。現代中国は、経済と伝統文化というジレンマに挟まれている。自然経済から市場経済へ、専制から開放へと時代が移り変わるにつれて、中国人の財産・資産に対する追求は激しさを増している。高度な経済発展の裏側で、偽物・海賊版商品の氾濫が大きな社会問題となっている。焦燥と物欲が、中国伝統的な価値観である公平と正義に衝撃を与えたのである。このような市場経済社会においては、契約を守るという観念がなければ、伝統文化が破壊される恐れがある。このような時代だからこそ、国学と言われる中国文化伝統が復興すべきなのだ。中国人は外に学ぶばかりではなく、内から固有的の伝統を復興させなければならない。

伝統に回帰するためには、まず歴史を知るべきである。2000 年以上の歴史をもつ中国の古典には「注疏伝義」という流れがある。『論語』を例にとってみよう。『論語』が定本となったのは漢代初期であり、その後現在にいたるまでの 2500 年間、『論語』の解釈書物は 4600 種類にも上っている。これらの解釈書は、それぞれの時代的特色を論語に賦与したと言える。

また、中国では現在「養生ブーム」という現象が起こっている。現代人も死ぬことを恐れているのだ。しかし、彼らは寿命以外の、生命のもう一つの意義を知らない。『論語』には「仁者寿」とある。仁とは徳である。そして、孔子と同じ時代に生きる老子も「以徳延年」「死而不亡者寿」と言った。後人はこの句に「亡者忘也、其道猶存」という注釈を付けている。人が死んでも、「寿」を忘れてはならないのである。これらは人の命の価値について述べているが、同様に国の伝統も忘れてはならない。

<u>2.「人」の問題</u>

現代中国では物欲と金銭が過度に重視され、社会制度には多くの欠陥があり、「人」を軽視する傾向が強い。ここ数年に起きた、中国の大震災や

火災のほとんどは人為的災害であった。ちなみに、「人」という概念は西欧では個人の存在を意味するが、中国では伝統的に国家や民族など、人々の集合体を意味してきた。

現在中国政府がスローガンとして掲げる「以人為本」は、個人の生命を重んじるものである。これを伝統文化によって解釈してみよう。例えば『易経』の中に「天・地・人、三才、人為貴」とある。『荀子』には「人有気有生有知有義、故為天下貴」とある。昔の中国は階級闘争を重視していたが、現在は個人の生命を尊重するようになったのだと言える。

3.伝統批判にありがちな誤り

中国には、政治批判と伝統批判を混同する人が多い。これは五四運動の頃から現在にいたるまで、一貫して解決されていない問題である。政治批判は、政治が社会・経済に与える影響に対する批判であるが、理論批判はロジックそのものに対する批判である。例えば、「礼教は人を食う」として儒教文化を批判したことで知られる魯迅は、清代の考証学者・戴震の影響を受けて朱熹の「存天理、滅人欲」を激しく批判したが、彼の批判はやはり政治批判であり、ロジックに対する批判ではない。理論的に見ると、朱子が言う「人欲」とは過度な欲求のことであり、戴震や魯迅の理解は誤っていると言わざるを得ない。政治批判と伝統批判は本来別々のものであるが、こうした二項対立的な考え方が 1960 年代以来長く中国社会を支配して社会を歪めてきた。このような過ちをなくすためには、「中庸」という考え方を復興させるべきだろう。

コメントペーパー

質問させていただいたように、今後の中国思想の研究にはやはり理論批判が重要であると思う。私見によれば、一部の学者は、伝統思想を再評価する際、理論的検討を十分にしない。例えば、それが西洋の民主主義に共通の性質があるなどの理由から礼賛する傾向があるように思われる。この問題の克服のためにも、理論批判が重要である。一方、五四以後なぜ政治批判があれほどの影響力をもったのかも考えるべきではないだろうか。すでに学者たちに指摘されているように厳しい伝統批判という思考スタイルも中国伝統知識人の特色の一つだと思われるからである。

中国古典の深さに感じ入った講義であった。中国の現在の社会問題に対して、古典が問題提起をしていることがよくわかった。しかし、古典は易しくはない。古典は解釈が必要であるし、解釈一つで古典は意味を変えうる。しかし、古典が一つの世界の見方であることが分かり、非常に感銘を受けた。王先生の古典に対する深い教養と、洞察が素晴らしかった。

現代中国が経済的に発展を背景として伝統が見直されていることは面白いと思った。先生の言うことには、納得できることが多かった。漢字で黒板に書いてくれたので、漢文を高校で勉強していて役に立ったと初めて思った。アジアでは漢字の存在は本当に大きいと実感した。理論と政治批判の話は、すごく興味深かった。中国は、伝統も豊かで、面白い考え方をする人が多いのかなと思った。それだからこそ、外から理解できないことも多いのかなと思った。深い勉強で理解できるのか。その空間に馴染んでいないと分からないものがあるのか。後者も多いかもしれないと思った。

中国における classic 生成の「場」について

石井剛（本学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授）

第 8 回：12 月 10 日

講師紹介

石井剛
（いしい　つよし）
東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・准教授。当テーマ講義コーディネーター。中国の伝統的知の根幹にあった経学（classicism）が西洋からの「哲学」的知の流入の中でどのように変容し、さらにそれが近代にいたってどのように革命思想へと変容していったのかに関心を持って研究を行っている。近年の中国における儒学復興運動についてもフィールドワークを実施している。

授業内容

橋本秀美『論語：心の鏡』(岩波書店、2009 年）をテクストとして受講生が発表を行い、そこで挙げられた論点を出発点として、中国における classic 生成の「場」について議論する。

受講生による発表

『「論語」心の鏡』を読んで

（発表者：文三 1 年　澤村琉璃子）

この本には、論語が中国の歴史の中で形成され解釈されてきた過程が書いてある。論語は断片的な記載の寄せ集めという体裁を持ち、それが後世様々な解釈をうんだ。また、論語は一人の人物が編纂したのではなく、「弟子たちの断片的記録は、少しずつまとめられ、まとめられたものがさらに整理され、という過程を何度となく繰り返して現在の『論語』に近い形になったと考えるのが穏当であろう。」

この本の第二章では鄭玄以前の漢代の論語の情況を述べている。漢代でも論語が盛んに読まれていたことは、論語は朱子によって重要視されるまではあまり読まれなかったと思っていた私にとっては意外だった。劉向と劉歆が前漢最末期に、朝廷資料室の古典籍を全面整理するまで、「『論語』は、決して固定した一種類の内容だったのではない。」(p.16) 劉向と劉歆たちは何百種類もの論語を三種類にまとめた。

第三章では主に鄭玄の経学を説明するために、まず六経と孔子の関係を説明している。孔子は六経を熱心に学び、弟子たちにも一生懸命学ばせた。後には「孔子が六経の伝承者の代表と見なされるようになっていく。」(p.27) 前漢時代には論語と六経に価値の上下はなかった。筆者は「前漢時代の人々が六経や論語を学習した主要な目的は、経典の奥義を究めたい、というようなことではなく、もっと現実的に、政治的議論の際に、これらの文句を適切あるいは巧妙に引用して、説得力を高めるという点にあったように思われる。」(p.29) という印象を持っている。「六経を中心とする経典を研究する学問は「経学」と呼ばれるが、後世二千年の経学の基礎となったのは、後漢の学者たちの研究だと言える。」(p.32) 前漢末から一経あるいは少数の経について、経文本来の意義から離れた解説を学習していた状況への批判が起こった。後漢王朝は政治権力の基盤が不安定で、政治が保守的で変化の少ないものになり、六経や論語を引用した議論が実質的意味を持つことは不可能だった。そのため、六経や論語などを文献学的、理論的に研究して、それによって聖人の教えを知ることもできるだろうという方向が生まれた。その代表が鄭玄である。鄭玄は六経や論語を校訂整理し、注釈を付けた。六経の間にある大量の矛盾を

矛盾なく解釈できる壮大な体系をつくった。論語の注についてもそれがいえる。

第四章は『論語集解』についての説明に多くをさいているが、『論語集解』出現以降も、唐代中期までは鄭玄注も並行して学習された。『孔子家語』を偽作したとされることで有名な王粛は、鄭玄説を批判し、「経書の字句との完全な整合性を犠牲にして、礼学体系の簡明性、自然性を追求した。」（p.50）その結果、後世現実制度の議論においては、合理的な王粛説が広く受け入れられた。王粛と同時期に何晏が代表編者となって、『論語集解』を編纂し、朝廷に献上した。何晏たちは「鄭玄注の中の経学的要素を、あきれるほど徹底的に排除している。」（pp.63-64）「論語本文の意味が、鄭玄注では立体的、体系的理解によって限定的に解釈されているが、集解による説明は曖昧で漠然とした印象に終始する。」（p.66）集解を出発点に、晋代以来盛んに論語解釈の各種議論が提出された。隋の統一の頃、学術の風気が一変した。「内輪受けの細かな議論はやめて、古典に直接向き合うべきだ、経書の内容そのものを素直に理解すべきだ、という主張をする人たちが現れた。」（p.75）

第五章は宋学について書かれている。冒頭部分は、宋代学術と言えば堅苦しく、形而上学的なものとしか思っていなかった私には、大変新鮮だった。「安氏の乱から唐が滅んで五代時期を経て、宋が天下を統一するまで、社会の混乱と疲弊は続いた。北宋の学者たちは、制度化された学術を学んだのではなく、理想社会実現の道を探るべく読書した。」（p.85）

第六章は清代について書かれている。清の乾隆時代に編纂された『四庫全書総目』は「『宋学』の末流は空理空論を弄ぶもの、『漢学』は朴実な文献学、といった印象」（p.101）を作った。これを知った時、私は自分が持っていた宋学に対する印象も『四庫全書総目』に作られたものであることに気付いた。やはり国家による大掛かりな編纂事業は大きな影響力を持っていると感じた。しかし、筆者は「漢学」「宋学」の単純な二分法では「複雑な歴史の正確な概括であるはずもない。」（p.101）と批判している。近代になってから、梁啓超や胡適らによって、清代の学術を科学的文献研究だとみなす学術史が生まれた。これは帝国主義に対抗するために必要な「科学技術と民族主義」を伝統文化と調和させるための考え方である。『論語』の注釈についても、清代に編纂されたものが、非常に高い価値を与えられた。しかし筆者は、「『論語』は本来断片的言葉の集積であり、客観的方法では解釈を確定しようが無いもの」（p.107）としている。

先生からのコメント

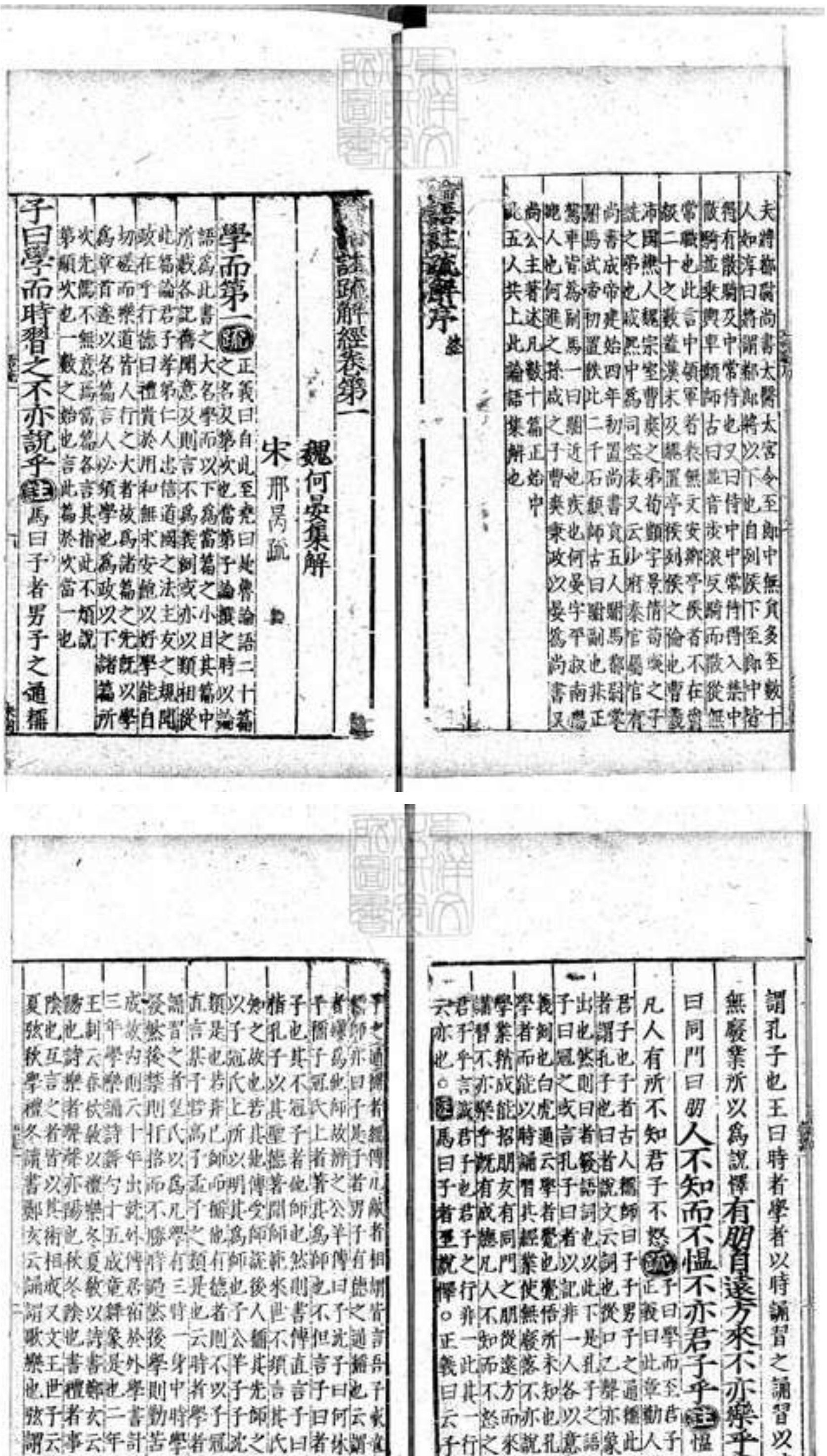
孔子の思想は、孔子自身によって記録されたものではなく、弟子達が記録し後世に伝えた言行録である。これと同じ現象は、西洋哲学にも見られる。ソクラテスの思想は弟子のプラトンが文字化し伝えたものである。現代とは異なりインターネットのような即時情報共有のメディアのない時代には、エクリチュールの転写は重大な意義を有していた。

しかし、パロール（ある社会で共有されている言語に依存しながら、ある個人がある時・ある場面で具体的に行使することば）を寄せ集めたエクリチュールには、常にずれが生じる。今回取り上げた『論語』にしても、もともとは断片的な記載の寄せ集めであり、その解釈も時代や個人によってさまざまである。つまり、古典は多種多様な解釈が無限に積み重ねられて形成されていくものであり、その「原形」は遡及が不可能である。したがって、古典を読む際には、「巨木を見るときには周辺の風景を見る必要がある」と指定テクストでたとえられているように、その古典に関連する歴史全体を見なければならないのである。

コメントペーパー

『論語』研究は、中国においても昔から行われていて、様々な解釈があり、中には対立するものがあることを知った。宋学よりも仏教というところが面白かった。仏教というのは、アジア共通の文化であるようなイメージがあるが、実はそこまで中国などには根付いていないことを考えると、不思議な感じがする。日本では、仏教という言葉が押し出され、儒教的な考え方は根付いていないと思いながらも、ところどころに、そのような考え方が存在するのではないか。「絶望も虚妄だ」という先生のコメント、指摘が興味深かった。人の意図は言葉だけで伝えるのは不可能であるのではないかと思った。

論語は解釈の積み上げによって現代に至っている。鄭玄・朱熹・銭大昕等幾多の経学者がそれぞれの時代、社会を反映して解釈している。これは歴史家と歴史家の記す歴史のつながりから見ても納得するところである。


論語註疏解經卷第一
魏何晏集解
宋邢昺疏
學而第一
子曰學而時習之不亦說乎
有朋自遠方來不亦樂乎
人不知而不慍不亦君子乎

▲宋本論語註疏解經二十巻（福建刊十三經註疏）

（東京大学東洋文化研究所ウェブページより転載）

画像は、学而第一の冒頭部

18世紀朝鮮の恋物語〈春香伝〉の古典化

趙寛子（ソウル国立大学校日本学研究所・HK教授）

第9回：2010年12月17日

講師紹介

趙寛子
（JO Gwan-ja）

ソウル大学校 HK 教授。日本語の著書に『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環――ナショナリズムと反復する植民地主義――』（有志舎、2007年）ほかあり。帝国支配下の「知」に関する探求を続け、同時代の朝鮮半島における古典復興に関しても論考がある。また、近年では日本浪漫派の「古典回帰」の問題についても関心を寄せており、帝国本国と植民地における文化状況の俯瞰を模索している

講義内容

〈春香伝〉は、18世紀に民俗芸能として成立し口承されてきた朝鮮の古典文学である。講義では、韓国で制作された〈春香伝〉の映画DVDを見てあらすじを理解した後に、〈春香伝〉が近代的な大衆文化として親しまれていくプロセスを、日韓の文化連環という文脈で考える。そこから、古典の解釈・翻訳・創造にまつわるさまざまな論点を見出し、議論を深める。

キーワード

朝鮮　古典文学　近代的大衆文化　植民地　文化連環

1.〈春香伝〉の概要

〈春香伝〉のあらすじは、以下のとおりである。全羅北道南源府使の息子・李夢龍（イ・モンニョン）と、妓生（キーセン、芸者のこと）である月梅（ウォルメ）の娘・成春香（ソン・チュニャン）は、広寒楼で出会い、愛を育む。しかし夢龍は、父の任期が終わり都に帰ることになる。夢龍と春香は再会を誓い合う。南源に新たに赴任した府使は、春香を我が物にしようとするが、春香は夢龍への貞節を守ることを主張し従わない。激怒した府使は、春香を拷問し投獄する。一方、科挙に合格して暗行御史（王命を受け、秘密裏に地方の悪政を監視する役人）となった夢龍は、南源に潜入する。夢龍は府使の悪事を暴いて彼を罰し、春香を救出する。その後、二人は末永く幸せに暮らす。

〈春香伝〉はもともと、18世紀からパンソリ（歌い手と太鼓の叩き手がペアになって物語を演ずる、朝鮮の伝統芸能）として口承されていた〈春香歌〉を土台としている。複数のパンソリ〈春香歌〉には定本がなく、地域による分類や物語の長短に差があったため、19世紀に文字化されたときには、『烈女春香守節歌』『春香伝』『水山広寒楼記』『南原古詞』『獄中花』など複数の版本・筆写本が出版された。いずれのバージョンにも共通しているのは、露骨な性的描写と、両班（ヤンバン、朝鮮王朝の特権身分であった官僚階級の総称）の女性が守るべき儒教的な徳目である「烈女不事二夫」、すなわち貞節の強調である。

2.近代的大衆文化としての〈春香伝〉

〈春香伝〉は近代になって異本がますます増えていくが、そのなかには朴永運『倫理小説広寒楼』（1913年）のように、〈春香伝〉を、近代的道徳を説く物語とする本もあった。1903年以降は劇場で唱劇として公演されるようになり、日本統治下では、朝鮮古典の日本語翻訳・出版を行っていた自由討究社のものをはじめ、〈春香伝〉に関する多くの書籍が刊行される。1923年には、日本人監督によって初の映画化がなされ、1938年に

は朝鮮人作家による日本語台本を用い日本人演出家が指導する〈春香伝〉の演劇が、新協劇団によって上演される。また、1930年代には、〈春香歌〉をはじめとするパンソリのレコードが朝鮮で発売された。ここで注目したいのは、1930 年代に、表象化・儀式化・理論化を通じて、〈春香伝〉が「古典」として位置づけられるようになったことである。例えば、1931 年には南源にて全国の著名な妓生 100 人が春香祠堂を建てて、祭祀を行った。1935-1940年には、日本浪漫派の思想運動と連動した民族文化論が朝鮮でも起こり、「古典復興」「伝統論」「朝鮮学」が追求され〈春香伝〉は「古典」としての確固たる地位を得るのである。その後、1960年代、70年代には、韓国及び北朝鮮で〈春香伝〉が映画化された。〈春香伝〉が近代になってリバイバルされ、代表的な「古典」となった背景としては以下の二つが考えられる。第一は、人々の日常的な欲望をドラマティックに表現した、その大衆性である。身分を越えた恋、不義の権力への抵抗、苦難の克服による幸福と成功の物語は、身分制度が厳しい社会のなかで自由を渇望していた朝鮮王朝末期の人々の心を動かしただろう。第二に、時代のイデオロギー、社会・文化的なダイナミズムが挙げられる。18 世紀の〈春香歌〉では、春香は妓生として、つまりエロスの対象として描かれていた。庶民文化の想像力は、儒教的身分秩序・性的なエネルギーの「解放」を求めていたのだと考えられる。だが、近代以降、国民国家への意識が高まっていく過程で、家父長制、忠君愛国の理念が必要とする女性像としての春香の姿が強調されていくのである。

3.時代による解釈・視点の変化、大衆文化の変異

現代の日韓両国では、〈春香伝〉に題材をとったラブコメディのドラマや漫画が人気を博している。2010 年の韓国映画『パンジャ伝』では、夢龍の下僕である房子（パンジャ）の視点から、既成のストーリーを組み替えて〈春香伝〉を「偽りの神話」とさえしているのである。また、〈春香伝〉の舞台である南源には春香テーマパークなるものがあり、そこで毎年開催される春香祭では、ミス春香コンテストが盛り上がりを見せている。つまり、〈春香伝〉は文化コンテンツ、文化商品として、日々新たに作られて（あるいは解体されて）いるのだと言える。これまで〈春香伝〉の古典化を通して見て来たように、古典の価値とは近代人の欲望によって解体されうるものであり、それ自体が文化資源や文化的原動力となりうるのである。したがって、古典化という現象を非常に現代的なものとして解釈する――つまり、「classic の現代性」に留意する必要がある。

講義には、大学院総合文化研究科地域文化研究専攻の外村大准教授も参加され、次のような補足説明をしていただいた。植民地時代の朝鮮において、朝鮮文化を維持するために発見されたのが、今回の授業で取り上げられた〈春香伝〉であった。〈春香伝〉は、日本には「朝鮮の忠臣蔵」として紹介され、北朝鮮では階級闘争における身分解放の物語とされてきた。

（いずれも、講義で使用された資料より抜粋）

▲パンソリ：クァンデ（芸能人）・鼓手・聴衆の様子

▲1947 年ころ発行された『春香伝』

（いずれも、講義で使用された資料より抜粋）

コメントペーパー

「classic の現代性」という言葉がとても心に残った。classic とは、あるコア（ここでは夢龍と春香の恋）を解釈して生まれるものだと思う。春香伝の柔軟性は、それが原本となるテクストがたくさん存在することに起因すると思う。孔子の『論語』や日本の『源氏物語』などは固定されたテクストが存在するため、自由度には限界が生じる。しかし、どれも「解釈」が生じるのは同じであり、時代の特色を強く反映する。論語の訓詁学・宋学、源氏の解釈・感想も大きく異なる。春香伝はその幅が大きいだけにより面白い。これからも、その動向を追っていきたいと思う。趙先生の語り口と教養に引きこまれた講義だった。ぜひ著作も拝読したいと思う。

古典と言えるか分からないというか、いろいろ解釈されるのが古典なんだと思った。だからこそロマンチックだと思う。古典は一種の資源だというのが印象的だった。烈女イメージも近代の解釈によるものだというのがとても意外だった。忠臣蔵にもいろいろなバージョンがあるというので興味を持った。

大変楽しく、興味深い講義だった。18 世紀の内容の分かりやすいものを古典として取り上げて、それがリバイバルした背景を考えさせる充実した時間だった。現代でどのように受け止められているのか、取り上げてくださり、面白かった。韓国社会が寛容になるにつれ女優も十代の人を用いるなど、一つの作品がリメイクされる様も社会とつなげて考えている点が、古典が現代でどのように扱われているのか、それを考える切り口となる視点が面白かった。

現代韓国における漢文学に対する認識について

三ツ井崇（本学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授）

第 10 回：2011 年 1 月 21 日

講師紹介

三ツ井崇

（みつい　たかし）

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・准教授。近現代朝鮮における言語政策・運動の展開と近代アカデミズムにおける「東洋」概念の形成とを並行的に観察する。とりわけ、植民地下朝鮮の言語支配の実像について従来の定説とは異なる新たな枠組みを提示し、日韓両国の学界で注目されている。論文に、「日本の東洋史学はどのように形成されたのか――白鳥庫吉の歴史学――」（都冕会・尹海東編『歴史学の世紀――20 世紀韓国と日本の歴史学――』ソウル：ヒューマニスト、2009 年、朝鮮語）、「植民地期朝鮮におけるハングル運動と「伝統」――「訓民正音」・植民地権力、そして「言語運動史」――」（『歴史評論』第 673 号、2006 年）ほか多数。

授業概要

生越直樹「朝鮮語と漢字」（村田雄二郎・C.ラマール編『漢字圏の近代：ことばと国家』東京大学出版会、2005 年）をテクストにして、受講生が現代韓国における漢文学に対する認識について発表する。自国の人が作った文字を使うのか、それともよその国から借りた文字を混ぜて使うのかをめぐって、50 年近く論争を繰り広げてきたという、韓国におけるハングルと漢字の在り方を考える。

キーワード

韓国朝鮮語　漢文･漢字　伝統文化　国語　植民地

受講生による発表

（発表者：文三１年　植田裕基）

長きにわたる漢文学の伝統がどのように捉えられているのかという疑問を、韓国の漢字教育の現状と漢字とハングルの平行世界という視点から考え、今後韓国は自国の伝統をどこに求めるのか、という疑問を提起した。この視点は、前の回の趙寛子先生の講義と生越先生の著作にかなりの影響を受けた。春香伝が古典化されるプロセスと、韓国における漢字使用の長い伝統は僕にとって大きな驚きであった。

次に今回のセミナーを担当してくださった三ツ井先生より、如何に現在の韓国における漢字認識が複雑であり、人それぞれによって認識が異なるか解説して頂いた。三ツ井先生は漢字、漢文を学ぶ老若男女を報じた東亜日報の記事を僕たちに見せてくれた。そこから、韓国の人々が仏典や美術、伝統文化への帰来として、漢文へ向かっていることがわかる。しかし、僕の発表は朝鮮半島が漢字使用を廃止し、実際に漢字使用が減っていることを前提にして進めたものであった。この二つのトピックからも、韓国の漢字に対する思いが如何に複雑かよくわかる。対立の構図で韓国における漢字、漢文認識を捉えると、漢字―漢文、伝統―近代、漢字―ハングルといった図式が浮かび上がってくる。使われる文字としての漢字、漢字を使って記される言語という漢文、漢文学が圧倒していた伝統世界と、ハングルが席巻してきた近代、朝鮮語を記す漢字、そして朝鮮語のために生まれ、朝鮮語と一体化した存在ともいえるハング

ル。

では、ハングルの伝統とは、朝鮮文学の伝統とは何なのか、という疑問が浮かび上がってくる。ハングルは15世紀に世宗によって作られ、韓国朝鮮語を記す上で非常に適している文字であるが、20世紀にいたるまで国で公式に用いられる正字としての立場は長らく得ることが出来ず、諺文という名さえ与えられていたが、民間ではハングル小説（当時は諺文小説と呼ばれていた）が記され、「声の読書」によって少しずつ広まっていた。20世紀からはハングルが正字となり、ハングルがナショナリズムとも結びつけられて地位が向上するとしたこの辺りから、朝鮮文学と言えば諺文小説、パンソリといったハングルで記されたものを指すのが当然とされ始めた。ハングルを推進する人々は、ハングル小説に伝統を求めた。しかし、この流れに趙潤済（チョ・ユンジェ）は反対した。彼は朝鮮で成立した文学を朝鮮文学と認めるべきだと唱え、それまでとは異なり朝鮮漢文学も朝鮮文学として取り入れるべきだと言っていた。さらに、当時は勅令公文式という方法が勅令を出す際に正文として国文、すなわちハングルが用いられるも、副文としては漢文が使用されたのである。ここにはハングル正書法がまだ揺らいでいたという要因もあるが、ハングル化の流れが進んでも、漢文が強い力を保っていたことがよくわかる。戦後、日本の植民地支配が終結してからハングルの勢いはさらに強まり、ハングル専用化が進められた。すると、前出の趙潤済はまたも異議を唱えたのである。

ディスカッションでは、自国語がありながら漢字文化圏の人々はなぜ漢文を愛好したのか、さらには韓国語で息づく漢字語、そして韓国における漢字教育の現状として、家庭によっては漢字を学ぶ塾に通わせる親もいるということが話された。特に、中国語話者からは古臭く感じられる韓国語における漢語表現は非常に面白いトピックであった。韓国朝鮮語の漢字、伝統はいったい何か？これは答えを求めることが非常に難しいが、言うならば時代の価値観のせめぎあいである。せめぎ合う価値観は、前出の漢字—漢文、伝統—近代、更には規範—慣用という対立も存在する。国際化の中で、自国のグローバリゼーションを進める韓国では、英語—韓国語という対立も現れるかもしれない。今後の韓国における漢字、そして言語の伝統の問題は今まさに生きており、そこからは韓国の人々の自国の文化、更には漢字文化圏への思いが反映されている。授業を通して、これからもその動向を見つめて行きたいと思った。

質問応答

Q.　漢文で書かれたものが現代韓国で古典として認識されていないのは、日本人の感覚からするともったいない気がするが、韓国人はどのように考えているのか。

A.　現代韓国において、漢文が全く古典と見なされていないわけではない。仏教や古典美術などの「伝統文化」を学ぶ人は漢文を勉強しているし、実は漢字復活論者も少なくない。もちろん、「伝統文化」を漢文とするかハングルとするかは、論者によって意見が分かれる。後者の立場に立つ人々は、1443年に世宗が「訓民正音」として公布したハングルの歴史性や伝統性を強調してきた。1920年代には、日本の植民地統治期における文化と伝統に関する論争のなかで、一部の文化人たちによって10月9日がハングルの日と制定された。一方、長い間公的には用いられなかったハングルよりも、朝鮮文化として定着してきた漢文学を国語として取り込むべきだと主張する趙潤済のような論者も現れた。趙の主張は結局広く受け入れられることはなく、戦後韓国ではハングル専用化が一気に進むことになるが、植民地時代の「伝統文化」に対する多様な価値観は現在にまで受け継がれている。

Q.　朝鮮語の古文は「古典」と言えるのか。

A.　「古典」とは言えないだろう。前回の授業で趙寛子先生が取り上げた〈春香伝〉などの「旧小

説」には定本がないため、何を「古典」とするのかも難しい。また、韓国では17世紀以降の朝鮮語を、古文ではなく「近代国語」と呼ぶので、日本語の感覚で言うところの古文という概念があるかどうかもわからない。

Q.　日本語と同様、韓国朝鮮語のなかにも漢字語があると言うが、それらをハングルで表記した場合、ハングルを見ただけで文意を理解することはできるのか。
A.　ほとんどの場合、文脈で意味を判断することができる。ここで注意したいのは、日韓では漢字が用いられてきた歴史的経緯が異なるため、漢文に対する認識にも差があるということだ。韓国朝鮮では、1894年の「甲午改革」で、公文書は全て国文（ハングル）で書き、適宜漢文訳を付すか、国漢文（ハングルと漢文併記）を用いるという勅令が出された。ハングルが公式化される一方、漢字は近代化を進める道具として使われ続けたのである。

Q.　朝鮮で漢文が歴史的に大きな意味をもってきたことを考えると、現代韓国で漢字語を使わないことは、かえって伝統の否定になるのではないか。
A.　そのように考える人も当然いる。逆に、漢字語を極力排し、「ウリマル」（我々の言葉）すなわちハングルだけで全てを表現するべきだと考える人もいる。だが、朝鮮語の特質を主張し伝統的規範としてのハングル専用化を実践しようとしても、現実における慣用という問題がある。漢字語を用いずハングルだけで全てを表現するとどうしても回りくどい表現になってしまい、実用の面では難しい。むしろ、漢字語を外来語と見なすならば、外来語を受け入れやすい点を朝鮮語の特質として考えることができるだろう。

コメントペーパー

韓国における文字の対立は、古典とは何か、といった根源的な問いにつながると思う。この点で、非常に面白かった。韓国語における言語内容や、文字の捉え方はこれから更に変わるものと思う。英語語彙の流入などの更なる問題が発生しうるであろうし、その際に韓国の人々がどのように自分たちの文字を考えるか、とても気になるところである。我々の伝統とは、時間的に成立するものなのか、それとも自明の性質として成立するのか、まだ問い続けねばならない気がした。

先生の返答：「問い続ける」ことが大事である。明確な、固定的な答えよりは、「揺らぎ」、「動き」などを直視することが、むしろ問いに迫る近道でもある。

日本と朝鮮で文字の使用法が違うようになったのは何故なのかと考えると難しい。全体的に見ると、漢文による文学とハングルによる文学の量はどのぐらい差があるのだろうか。

先生の返答：常に「なぜ」を問うてみることが重要である。個人の言語意識を一度、同じ時代の社会や国家の問題と考えてみるのもいいだろう。自分は社会のどのような影響を受けているのか、あるいは自分はその社会とどのように関わろうとしているのか。言語（意識）と社会の問題は、まさにそのような関係性をめぐるせめぎ合いである。

韓国は現代においてはほとんどハングルしか使わないのが面白い。言葉（音）のもととなっているのは漢字であるのに、なぜハングルに重きを置くようになったのか。その一因として、漢字の複雑さ、非効率性から識字率の低さを招いたことが挙げられているのは注目に値すると思う。日本でも中国でも、昔の中国の漢字は、簡略化され、日本においては、ひらがなを交えて機能している。音ではなく意味からなる漢語は覚えていなければ使えない。これはやはり不便なのか。国民全員が使う文字として漢字は難解すぎるのか、ものすごく興味があり、疑問にも思う。

先生の返答：ことばと文字を機能面で捉えたときどう考えればよいか、良い質問である。ことばと文字の問題は機能面だけでは捉えられない。言語（文字）に対する意識と機能の両方の問題が複雑に絡み合っていく。

編集後記

国際化が叫ばれて久しいが、昨今の「国際化」は、経済偏重のあまり、相互の社会的・文化的背景への理解という側面は取り残されていると言われている。例えば日中関係は、「政冷経熱」だとよく言われるが、「冷」なのは「政」だけではなく、相手の文化・歴史・思想に対して、双方とも基本的に無関心である。斯かる現状にあって本テーマ講義は、東アジアの「古典」に注目することで、東アジア諸地域の思想・価値観の共通性および独自性について、次代を担う若人たちに問いかけ、相互の文化に対し理解を深める種を播くという意義を果たしたと言えよう。本報告集を通じて、講義の概要のみならず、生き生きとした授業風景の一端をも伝えることができれば、幸甚である。

（EALAI 特任研究員　田中靖彦）

今学期のテーマ講義は、タイトルの「classic 生成の『場』を問う：東アジアの classic と現代」が示す以上に、多角的なアプローチから「classic とは何か」を考えさせてくれるものであった。海外から先生がいらしたベトナム・中国・韓国朝鮮の回、日本における『万葉集』とギリシア古典文学の受容の回のいずれにおいても、取捨選択・創出され変容を繰り返していく「古典」の在り方には、その時々の人々の感情だけでなく、その過程を観察する私たち自身の視点までもが色濃く反映されているという点が興味深かった。石井先生がご指摘されていたように、「古典」の原形は遡及が不可能なものであり、また、「古典」を知るためにはそれが形成されてきた歴史的背景全体――まさしく授業タイトルの「classic 生成の『場』」――を理解することが必要不可欠なのだろう。セミナーの回に関して言えば、受講生の人数が少なかったために先生と受講生との距離が近く、各人が積極的に議論に参加していたのが印象的であった。今回この冊子を編集していて、授業中にとったメモを振り返ってみると、毎回の議論の濃密さに驚かされる。

全体を通しての感想を正直に告白すると、自分が学部前期課程のときにもこのような授業に出会えていたらよかったのに……と受講生の方々をうらやましく思わずにはいられないほど、授業から学ばせていただくことが多かった。専門外の私に TA という機会を与えてくださった EALAI の方々に、心より感謝している。そして、今回のテーマ講義をコーディネートしてくださった石井先生や EALAI の方々、お世話になった TA の呉さん、多くのことを学ばせてくださった受講生の方々にお礼を申し上げたい。

（TA　山﨑典子）

留学生として、テーマ講義も TA も初めてなので、非常に貴重な学習体験となった。ベトナム・日本・中国・韓国、各国からの先生のレクチャーを直に聴き、「古典」の定義や東アジア文化圏諸国の間にある深い繋がりなどについて、改めて実感し、新たな認識を得た部分が多々あった。「古典」は、我々の思ったよりも身近なものであり、知識として存在するだけではなく、現実社会が抱えている様々の問題を解決する方法を生み出す、一種の非物質資源として、受け継ぐべき文化遺産である。最後に、この仕事を紹介してくださった石井先生、EALAI の皆様、TA の山﨑さん、受講生の皆さんに感謝したい。

（TA　呉修喆）

協力者一覧

（五十音順）

■　担当教員　Professor in Charge

石井　剛　　ISHII　Tsuyoshi

■　EALAI 講師　EALAI Assistant Professor

永原　歩　　NAGAHARA　Ayumi

■　EALAI 研究員　EALAI Researcher

田中　靖彦　　TANAKA　Yasuhiko

■　テーマ講義 TA　Teaching Assistants

呉　修喆　　WU Xiuzhe

山﨑　典子　　YAMAZAKI　Noriko

■　報告集編集　Editors

呉　修喆　　WU Xiuzhe

田中　靖彦　　TANAKA　Yasuhiko

山﨑　典子　　YAMAZAKI　Noriko

■　協力　Cooperation

国立国会図書館（資料提供）National Diet Library

田中　有紀　　TANAKA　Yuki

東京大学東洋文化研究所（資料提供）Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

ボ・ミン・ブ　　VO Minh Vu

2011 年 3 月 31 日発行

東京大学

東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（EALAI）

03-5465-8835　（TEL&FAX）

contact@ealai.c.u-tokyo.ac.jp

http://www.ealai.c.u-tokyo.ac.jp/